

いよび

No. 76

特集
Special Section

地域と協力した魅力的な 大学 & 都市づくり

岡山大学地域総合研究センターの
取り組みをクローズアップ

- 岡山大学から世界へ、グローバルに活躍する卒業生
大政 朋子 さん AMDA・GPSP
クアラルンプール事務所長
- 研究室訪問 宮地 孝明 自然生命科学研究支援センター・
准教授
- きらり岡大生 西村 義人 医学部医学科6年
- 岡大生は後楽園入園無料に
- 学生が大学のグローバル化を協議 森田学長に提案書提出
- 宮竹教授が参画した研究が農水省の「研究成果10大トピックス」に
- 小児の先天性心臓病 難手術に成功
- 大学のPR 動画制作
- News & Topics 大学の動き／研究・臨床成果
- インド駐在員のコラム
- 読者アンケートのページを開設しました
- 編集後記



瀬戸内市裳掛地区の方々との交流



2014年度に実施した その他の学生企画

学生取材班

～岡山大学をSNSで盛り上げよう!～
学生目線で岡山大学の魅力を紹介!取材記事を公式Facebookに投稿し、在校生のみならず卒業生や地域の方々に岡山大学の「今」を伝える。

MACHI FES

「学生の夢をかなえる」がコンセプト。積極的にまちに出て地域の人とかかわる学生を増やす。他大学の学生とも協力し、ゴミ拾いイベントやアートフェス、ホームカミングデー(岡山大学)の空間コーディネートも行う。

おかやまバトン

岡山大学と地域、岡山と被災地をつなぐ支援活動。福島や南三陸で日本舞踊や野球をする子どもたちの1週間程度の合宿を受け入れ、遠く離れた岡山の地にも「今を生きる仲間」がいることを感じてもらう。

社会科学教育学研究室

～学生と市民が語り合うイベント「ティーチン岡山」～
学生と市民が語り合うイベント「ティーチン岡山」の開催を核に、大学と地域が連携し、「よりよいまち岡山」を構想、地域に発信することを目指す。

Li☆Luck ～七夕祭～

「大学と地域との交流」「学生間のつながりを広げる、深める」「自己啓発」を目的として、七夕祭りやイルミネーション企画を立案、準備、運営を行う。

文学部社文文3 回生 頭島に架かる希望の橋 PART II

～日生諸島の変化を追って～
2015年4月に完成予定の「備前日生大橋」。この架橋が日生諸島の住民の生活に与える影響を、橋の架かる頭島だけでなく、架からない大分島も含めて考察する。

満月BAR 実行委員会

満月の夜、西川緑道公園で、「おしゃれ」にフードやドリンク、音楽を楽しめる空間をすることで、岡山男子のおもてなしを高め、にぎわいをつくり、西川の素敵なお店を知ってもらい、若者が自分たちでまちをつくることなどを目的とする。

めめも会

大学生の考える「よりよく生きる」プロジェクト
～地域で語り合い、発信する「死生観」～
命の誕生、救命、療養、看取りの現場におもむき、人間の生と死を見つめ直し、現代社会の課題解決に資する死生観を考え、創出する場の形成を目的とする。

学生トーク実行委員会

～大学生とトークディスカッション in 岡山大学オープンキャンパス～
大学受験を控える高校生に現役の大学生や岡山大学卒業生と交流する場を創出し、自らの進路選択に役立ててもらおう。「カッコいい」人との交流を通して岡山大学と岡山に魅力を感じてもらおうことを目的とする。



岡山大学まちづくり研究会

岡山大学まちづくり研究会は少子高齢化や過疎化が進む中山間地域に実際に行き、地域の方々と交流を深めながら「まちおこし」に取り組んでいます。今年で設立2年目。普段は週1回、学内ミーティングを開き、瀬戸内市裳掛地区と総社市山手地区の2カ所を重点地域として活動しています。裳掛地区では2014年度は地域イベントで子ども向けに射的やクイズラリーを企画・実行したり、空き地を開墾して農産物を生産・販売したり、地域の方々の意見や現地調査をもとに地図作りなども行いました。

メンバーは学年の壁もなく楽しく活動しています。自分の好きなこと、興味のあることを実践でき、特に地域の方々と行動をとるときは新たな気づきがあり、多くを学ぶことができます。地域ののんびりとした雰囲気や季節の食材などが堪能できるのもうれいところ。普段の大学生生活では味わえない経験ができるのが一番の魅力です。

環境理工学部
環境管理工学科
／藤本 一志



国際医療勉強会ILOHA



国際医療勉強会ILOHAは2012年2月に医・歯・薬学部の学生が中心になって結成。「日本や海外の社会問題」を学びたい、「問題解決に貢献したい」という仲間が集まり、今では医・歯・薬学部以外の学部、他大学・専門学校からも参加しています。具体的な活動としては週1回の勉強会や、勉強会での学びを深めるために国内外で研修を行い、研修を通して発見した課題を地域の方々に伝えるために報告会や講演会も企画。県内の高校を訪れ、学んだことを出張講義の形で若い世代に伝えていく活動にも力を入れています。

私たちは岡山でこうした①学ぶ②現場で感じる③アクションを起こすという「学びサイクル」を実践しています。学びを岡山に還元することを理想に掲げ、その過程で友人や地域の方々と巻き込みながら活動に励んでいます。普段の講義では学べないことが学べ、自分の想いを素直に吐きだせ、そして形にできる団体です。

法学部法学科
岡田 真理子・花岡 里伸



学生企画は単位認定されるものではないのですが、学生はとてども意欲的。それぞれのフィールドで受け入れられる努力を重ね、地域から期待も膨らんでおり、そういう学生が岡山大学にいることは誇りでもあります。まちづくりや地域活動は生半かな気持ちでは務まらず、一瞬で信頼を失うことも。そういった緊張感も学生に体感してほしいことです。大学とともに地域や経済界、NPOなどの活動も盛り上がり、ウインウインの関係で岡山全体の活性化につながればと思います。



岩瀬泰助教

特集
Special Section

大学 & 都市づくり

地域と協力した魅力的な

岡山大学地域総合研究センターの取り組みをクローズアップ

山川路代助教

地域と大学が協働する「学都構想」の実現を重要ミッションとして2011年に設立した岡山大学地域総合研究センター(AGORA)では、地域住民や自治体、企業、NPOなどと連携したさまざまなプロジェクトを展開している。その1つ、「学都チャレンジ企画」では学生が主体的にまちづくりに参加し、地域と大学をつなぐ「学生企画」を募集。AGORAのサポートのもと、岡山を魅力的にするためのアイデアを実践する学生企画の取り組みを紹介する。



おかやま百年構想

なかへと波及させるべく、第一弾として奉還町商店街からフアジャーノ岡山の魅力を発信する「奉還町フアジャーノ計画」を実施。大きなタペストリーに試合結果や順位を表示したり、応援絵馬イベントやイラスト展を開催したりと思いつくままに企画実行しています。

メンバーはスポーツ好きだけでなく、サークルに入ってからスポーツを始めた女子学生もいます。スタジアムに行つてスポーツの楽しさを発見したり、自分でデザインしたものを商店街に掲示したり、いろんなことにチャレンジできます。活動3年目の今年からは岡山シーガルズともコラボする予定。Facebookで情報発信するなどより多くの方に活動を知っていただき、岡山をスポーツでもっと盛り上げていきたいです。

(経済学部経済学科/長宗 武司)



おかやま百年構想は「スポーツでまちなかを盛り上げる」を合言葉に、商店街を舞台に活動しているまちづくりサークルです。

岡山はサッカーJ2・フアジャーノ岡山やバレーボール女子の岡山シーガルズが活躍するなどスポーツがとてども盛んです。私たちはその盛り上がりを見ながら、スタジアムからまちまで波及させるべく、第一弾として奉還町商店街からフアジャーノ岡山の魅力を発信する「奉還町フアジャーノ計画」を実施。大きなタペストリーに試合結果や順位を表示したり、応援絵馬イベントやイラスト展を開催したりと思いつくままに企画実行しています。



スクールボランティアビューロー学生スタッフ



土曜日はやし塾で学習支援のボランティアを行う大学生

スクールボランティアビューロー学生スタッフは教員志望や学校・園でボランティア活動をしてみたいという学生にスクールボランティアの魅力や伝え、支援することを目的に、岡山大学教師教育開発センター内に2年前に発足。教員を目指すさまざまな研究科・学部の学生が集まり、ボランティア活動事例の作成をはじめ、ボランティア活動希望者を対象に、県内の各教育委員会や学校・園からのボランティア活動とのマッチングができるスクールボランティアフェアなどを企画・実行しています。

スクールボランティアというのは他のボランティアとは少し異なり、学校・園という教育現場でしか体験できない新たな発見や学びが多くあります。私たちも学生ボランティアを支援するだけではなく自らも積極的にスクールボランティアに参加し、「学生目線で魅力を発信する」ことをモットーに学生のスクールボランティアへの関心を高める活動をしていきたいです。

(文学部人文学科/大宇根 千宏)

スクールボランティアフェア
4月29日(水・祝)開催!!
岡山大学創立五十周年記念館



AGORAの活動紹介

学都研究

大学と地域の連携に関する学術研究を蓄積し、学都の創生に不可欠な情報を発信。「地域と医療」「地域と教育・スポーツ」「まちづくり・地域創生」「地域と環境」を研究の柱として、岡山大学と岡山県が持つ独自性を意識した研究に取り組んでいる。



まちなかキャンパス 事業

教職員や学生がキャンパスの外に出て、地域の人と一緒にまち課題を発掘したり、解決策を議論し、実践力を身につける取り組みを展開。魅力ある岡山の創造に貢献するとともに、学都岡山を担う若者の育成を目指す。

まちなかキャンパス 城下ステーション

2012年6月、学外初の地域連携拠点として岡山市北区石関町にオープン。若者の政治参加について考えるアゴラ喫茶や、身近な話題をテーマにした哲学カフェなど、学生や教職員、地域住民らが自由に語り合える多彩な公開講座を開いている。



西川アゴラ

岡山市とまちづくりに関する連携協定を結び、2014年10月、2カ所目のまちなかキャンパスとして同市北区田町にオープン。西川緑道公園界隈を中心にまちなかの魅力アップに携わる地域住民や行政、NPOとともににぎわい創出や課題解決などを話し合っている。



留学生のまちづくり

留学生がまちづくりを経験し、岡山を好きになることで、岡山の友好親善大使を育てる大学と地域の協働の取り組み。スーパーグローバル大学創成支援事業との関連も大きい。留学生は名所や伝統的町並みに触れ、岡山のまちづくりにも参加している。



シンクタンク機能

自治体や経済界などからまちづくりに関する調査・研究を受託し、学術的な視点も加えながら地域発展に資する提言を行う。これまでに西川緑道公園周辺現況調査、岡山駅前イオン出店影響調査などを実施。結果をもとにワークショップや講演会も開いている。



地域社会を変革する人財を育てる 実践型社会連携教育プログラム



岡山大学ではAGORA主導の新タイプの授業方法として2014年度から「実践型社会連携教育プログラム」を試行的に実施している。学生が地域社会に出て、さまざまな人とのかかわりを通して地域課題に気づき、解決策を考え、実践できるカリキュラムを構成。2015年度からは全学的展開を進め、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択された「PRIMEプログラム～世界で活躍できる『実践人』を育成する!～」の柱の1つとしてグローバル実践型教育も構築しながら、社会の持続的発展に貢献できる人財育成に力を入れる。

4つの領域

～ねらいと授業例～

地域と教育再生

岡山では近年、不登校やいじめ、学力低下などの問題が深刻化。教員志望だけでなく、教育に関心のある学生も対象に学校や地域で子どもの見守り、教育支援活動に取り組む授業を展開し、岡山の教育再生を目指す。

2014年度に実施した「地域社会貢献型学習支援活動」では総社市と連携し、学生が家庭に事情を抱える中学生に学習指導を行った。週2回、4カ月にわたってかわる中で両者間には信頼関係が生まれ、中学生は勉強意欲が高まって成績も向上。学生も実践を通して社会的困難に対する理解が深まった。

地域と技術・環境

社会の持続的発展を実現するためには欠かせない、環境に配慮した新しい技術開発の社会背景や動向を現場で体感し、それを自分の問題として考えられるような授業を計画。まさに「ESD（持続可能な開発のための教育）」にもつながるものである。

2014年度に実施した「倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境」では日本有数のコンビナートを擁する水島地区をフィールドとして、学生は地域開発や公害の歴史などを学んだ。行政や企業、住民、地域で



地域と医療

超少子高齢化が進み、地域包括ケアシステム構築が求められる中、いろいろな専門分野からの草の根的な支援が必要。自治体や介護施設、NPO、病院などと連携した授業を展開し、地域住民や現場で働く人たちの声を聞く機会を提供する。

2010年に始まった「多職種連携と地域包括ケアのワークショップ」では、さまざまな専門分野からなる岡山県内の大学・専門学校・学生と教職員が地域で1泊2日のワークショップを実施。真庭市、笠岡市などで計6回行ったが、学生は土地ごとに地域医療や介護のまちづくりが異なり、多面的な分析や協



まちづくり

働の重要性を学んだ。2015年度からはこれを授業科目として開設。また、グローバル実践型教育の開発に向けて、岡山大学インド・コルカタ拠点での旅行医学の授業計画を進めている。

まちづくりに関するさまざまな活動を独自に展開しており、その経験や人的ネットワークも活用して授業を進める。自治体の都市計画に大学の専門知識を生かし、実行や改善などの原動力として学生が参加する方法を考え、まちづくりにかかわることの意義を学ぶ。

2012年度に岡山市から受託した西川緑道公園周辺のにぎわいに関する調査で、学生はイベントのモニタリングや通行量調査などに参加。現場調査でしか見えてこない法則性に気づき、市民のニーズを踏まえたまちづくりについて考える機会となった。2015年度からは「フィールド調査の基礎を学ぶ」を開講する。



◀ AGORAの取り組みについて話す三村聡教授



AMDA GPSP (Global Partnership for Sustainable Peace: 世界平和パートナーシップ) クアラルンプール事務所長 ◆
岡山大学法学部(夜間主コース)卒/社会文化科学研究科修士課程修了

大政 朋子

O M A S A T o m o k o

岡山を拠点に、世界で活躍する国際医療ボランティア「AMDA」。大政さんは、その一員としてマレーシアの事務所に勤務している。岡山大の大学院生だった彼女が、世界に飛び立つきっかけになったのは、1通のメールだった。



▶東南アジア洪水緊急救援活動で物資を配布する大政さん
=1月、クアラルンプール

- ▶おおまさ ともこ (42歳)
- 1972(昭和47)年 スイス生まれ
- 2008(平成20)年 岡山大学法学部(夜間主コース)卒
- 2011(平成23)年 岡山大学大学院社会文化科学研究科修士課程修了
- 2011(平成23)年 AMDAに就職 東北事業担当
- 2014(平成26)年 AMDA GPSP クアラルンプール事務所長

「内戦」といった言葉に、「遠くよその国の出

国際法の講義は、世界に目を向けるきっかけになりました。それまではテレビから聞こえてくる「紛争」に入りました。

以前は、保育士として児童養護施設で働いていました。虐待を受けた子どもの親権問題にジレンマを感じ、「法律の根本を学

ばなければ子どもは守れない」と、退職して法学部に入りました。

「日本だけでいいの?」
「明日、被災地に行ってください。」
当時、私は国際法を研究する大学院生。国際医療ボランティアとして世界で活躍するAMDAを修士論文のテーマにしており、インターシッピング生としてお世話になっていました。支援活動をした経験はありませんでしたが、翌朝には被災地に向けて出発。「自分に何かできるだろう」と、不安な気持ちもありました。

1通のメール
「私にも何かお手伝いできることはありませんか?」
東日本大震災が発生した2011年3月11日。居ても立っても居られず、AMDA本部にメールを送っていました。およそ1分後に来た返信には、こうありました。
「明日、被災地に行ってください。」
当時、私は国際法を研究する大学院生。国際医療ボランティアとして世界で活躍するAMDAを修士論文のテーマにしており、インターシッピング生としてお世話になっていました。支援活動をした経験はありませんでしたが、翌朝には被災地に向けて出発。「自分に何かできるだろう」と、不安な気持ちもありました。

聞かされてくる「紛争」に、「遠くよその国の出

東北に戻ってからは、さまざま支援を行いました。その一つとして、岩手、宮城、福島

被災地をつなげる
東北に戻ってからは、さまざま支援を行いました。その一つとして、岩手、宮城、福島



小さなアクションが
大きな一歩に

■ AMDA
所在地：岡山市北区伊福町
事業内容：緊急人道支援
国際医療ボランティアとして、災害や紛争発生時、医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開。世界30カ国にある支部のネットワークを活かし、多国籍医師団を結成して実施している。

「高度な知の創成と的確な知の継承」。岡山大学の理念のもとに教育・研究を展開する個性あふれる教員たち。研究室を訪ねる。

MIYAJI TAKAAKI (33歳)
 ▶1981年 三重県松阪市生まれ
 ▶2000年 三重県立松阪高等学校 卒業
 ▶2004年 岡山大学薬学部総合薬学科 卒業
 ▶2006年 岡山大学大学院自然科学研究科薬品科学専攻 博士前期課程 修了
 ▶2009年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科創薬生命科学専攻 博士後期課程 修了
 ▶2009年 岡山大学自然生命科学研究支援センター 助教
 ▶2012年 岡山大学自然生命科学研究支援センター 准教授



自然生命科学研究支援センター・准教授

宮地 孝明



◀『Nature Plants』創刊号で特集されたビタミンCトランスポーターの発見
 Reprinted by permission from Macmillan Publishers Ltd. Nature Plants Vol.1, Art No.14012, copyright 2015. Online Only

ひたむきに努力
 自他ともに認める真面目な性格は、研究者としての「最大の武器」かもしれない。生物が体の中で物質を運ぶ役割を果たすタンパク質「トランスポーター（輸送体）」を研究。33歳という若さながら、国内外で注目を集める研究成果に携わってきた。「今まで誰も見つけられなかったものを発見するには、ひたむきな努力なしでは達成できない」と言い切る。

トランスポーターは、情報伝達や薬物排出に関与。解明することで、情報伝達に起因する疾患の原因解明や少ない投与量で効果が高く、体への害が少ない薬を開発することにつながる。生物の体の中には、たくさんトランスポーターが存在しているが、まだまだ特定されていない部分が多い。

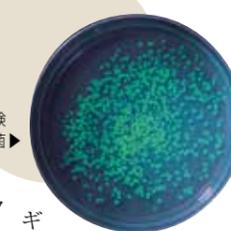
宮地准教授らは、高い技術を用いて、これまでに人や植物のトランスポーターを次々と見つけてきた。1月には強い光から身をを守るために必要な植物のビタミンCトランスポーターを発見。強光などの環境ストレスによ

今まで誰も特定できなかった 『未知の世界』に挑む

情報伝達や薬物排出に関与する体の仕組みを研究する宮地孝明准教授。ヒトの神経疾患や糖尿病、植物の環境ストレス耐性など幅広い分野を探索。人の役に立つ成果を目指し、ひたむきな努力を続けている。



組換え DNA 実験
 緑色に発光する大腸菌



り、地球規模での農地悪化が問題となっている中、作物のストレス耐性を上げることに関与し、立つ成果として話題になった。

未踏の領域に
 薬に興味を持ったのは高校生の時だった。当時、がんで闘病中の祖父が生きる支えにしていたのが漢方薬。その姿を見て、「薬を研究して、治療で人の役に立ちたい」と、薬学の道を目指すようになった。

出身は三重県。岡山大学薬学部のパンフレットに書いてあった「研究者あたりの発表論文数が国立大トップ」という、うたい文句に、研究が盛んなイメージを持ち、入学した。学部の4年間で幅広い薬学を学び、薬剤師の資格を取得。大学院に進んだからは、生化学分野の研究室で、神経疾患や糖尿病に関するトランスポーターの役割や測定方法を学んだ。

印象深い研究がある。脳神経で情報伝達に関わるアミノ酸の一つ・アスパラギン酸の新しいトランスポーターを世界で初めて見つけ、測定できた時だ。「誰も測れなかったものを自分が一番に測れたことは、感動だった」と振り返る。未踏の領域に、最初の一步を踏み入れる喜びを、その時知った。

高大連携と地域貢献
 現在所属するのは、最先端のゲノム（遺伝子）やプロテオーム（タンパク質）解析装置を保有する自然生命科学研究支援センターのゲノム・プロテオーム解析部門。高校生対象に施設見学を行っているほか、大学や地域の研究機関の受託解析を請け負うなど、地域の研究を支える重要な役割を果たしている。

最先端技術に触れてもらうと、高校生に組換えDNA実験を体験してもらおう取り組みも行っている。ノーベル化学賞でも知られるオワンクラゲの緑色蛍光タンパク質（GFP）を大腸菌に導入。UVランプを当てると、緑色に発光するもので、「最初は慣れない実験に戸惑う表情をしている高校生も、最後に光るとはしゃいでくれる」とほほ笑む。

新たに発見する面白さを知っているからこそ、「体験することではわからなかったことに気づいたり、研究に関心を持ってくれればうれしい」と話す。

研究の道は、失敗の連続で、うまくいかないことが多い。だが、「努力することが、一番の近道」と宮地准教授。その主張は、身を持って証明するつもりだ。

西村 義人

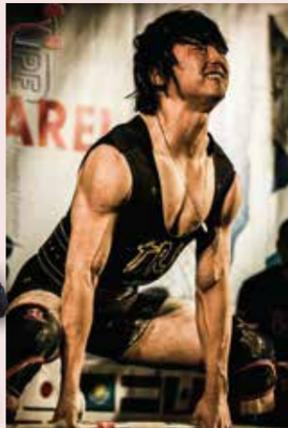
医学部医学科6年

NISHIMURA YOSHITO

研究、スポーツ、趣味、特技... 学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。そんなきらりと光る学生を、同じ学生の目線から紹介する。



▼デッドリフト270キロに成功



達成感が最大の魅力

現役医学生でありながら、日本記録を持つパワーリフティング競技者。西村義人さん（医学部医学科6年）は、全く違った二つの顔を持っている。

昨年11月にアメリカで開催された「第44回世界パワーリフティング選手権大会」。66キロ級で見事2位に輝いた。日本人が同大会で2位になるのは歴代4人目で、西村さんは最年少。これまでも数々の国際大会で優勝した経験があり、常に圧倒的な実力を見せてつけている。

競技を始めたのは、中学3年生の時。当時はバスケットボール部だったが、筋力トレーニングの一環で取り組んでいたベンチプレスの大会が地元であることを知り、力試しで参加。いきなり好記録を打ち出した。

大会関係者の勧めもあり、その後、パワーリフティング大会に出場するようになった。身近に指導者がおらず、インターネットの情報を参考にすると、手探りで練習。

自身でメニューを組みながら、着実に力をつけていった。「記録を更新できた時の達成感が最大の魅力。競技を通じて、たくさんの仲間ができたことも財産」と話す。



世界パワーリフティング選手権大会表彰式 準優勝▲



スクワット290キロに成功▲

勉学との両立

母親を食道がんで亡くしたのは小学6年生の時。卒業式の1週間前だった。一番寄り添っていた時期に母親といられなかった記憶から、医者に対してあまり良いイメージを持っていなかった。だが、進路を決める際に「医学を学ぶ道」を選んでしたのは、「母の病気が深層心理できっかけになっているのかもしれない」と語る。

自ら習得法を編み出し、自身を高めるというスタイルは、勉強でも同じだ。英語は中学から授業以外の時間も利用して、独学で習得。大学入学時には、TOEIC（990点満点）で985点という高得点をたたき出した。今年2月の医師国家試験前は、1日9、10時間机に向かいながら、パワーリフティングの練習と両

立。限られた環境の中で、限られた時間をどう上手に使うかを常に意識している。

卒業後は、岡山大学病院で研修医として働く。興味のある分野は、リウマチや膠原病などの慢性疾患で、「二人の患者さんと長く付き添える医者でありたい」と考えている。昨年は、アメリカの医師国家試験にあたるUSMLEに合格。「アメリカの医学の優れた分野も学びにきたい」と意欲的だ。

医師になっても競技は続けていく。2017年にポーランドで行われる国際的な総合競技大会「ワールドゲームズ」に出場することが目標だ。日本代表に選ばれるためには、国内外で一定以上の成績を残し続けなければならない。「研修が始まると、練習時間をつくるのが、今より難しくなるが、ベストを尽くしたい」と力を込める。自らが自らを開拓し、そして超えていく。その信念はこれからも変わることはない。



学内で練習をする西村さん▶

岡山大学 ウェイトリフティング部



1〜4年生47人が在籍している。主な活動は、週2回の合同練習、年2回の合宿、パワーリフティング大会へ出場など。2012年の「第39回全日本学生パワーリフティング選手権大会」男子団体V10達成、14年の「第41回全日本学生パワーリフティング選手権大会」総合団体で準優勝している。

※パワーリフティングとは...

バーベルを仰向けで持ち上げるベンチプレス、肩で背負って屈伸するスクワット、床から腰の高さまで持ち上げるデッドリフトの3種類の合計重量で勝敗を競うスポーツ。

インタビュー
岡大学生取材班
医学部保健学科 1年
谷部 麗華



宮竹教授が参画した研究が農水省の「研究成果10大トピックス」に

3 TOPICS

Okayama University
現在、施設野菜類での現場普及と露地での登録に向けて取り組みを進めている。宮竹教授は「飛ばないナミテントウ」は古くから農業が採用してきた育種の技術を使って開発されたもので、環境に優しい害虫防除法として期待できると話している。

飛ばないナミテントウ▶



岡山大学が参画している研究成果が昨年12月10日、農林水産省が選出する「2014年農林水産研究成果10大トピックス」に選ばれた。今回選出されたのは、

本学大学院環境生命科学研究科（農学系）の宮竹貴久教授が参画した「飛ばないナミテントウ」の育成と利用技術の開発「アブラムシ防除に強力でやさしい味方誕生」。農作物において防除が難しい害虫であるアブラムシに対して、天敵のナミテントウを有効利用。ナミテントウの中から、飛翔能力の低い個体を検出し、作物上によく定着する系統「飛ばないナミテントウ」を育成することで、従来より効率の良い「生物農薬」として利用できる。



後楽園（岡山県提供）▶



◀登録証交付式（岡山県庁にて）

TOPICS

Okayama University

岡大生は後楽園入園無料に

岡山大学は1月から、学生が後楽園（岡山市）などに無料で入園できる「岡山後楽園キャンパスメンバーズ制度」に加入した。若者に後楽園の歴史的文化的価値を認識してもらい、岡山県を代表する観光地としての魅力を県内外へ情報発信してもらえるように設置された制度。岡大生（学部生・大学院生）は学生証を提示すれば、後楽園、岡山県立博物館、岡山県立美術館（博物館・美術館）に加入した。

昨年12月25日には、県庁で交付式があり、伊原木隆太知事から理学部3年角谷謙斗さんに登録証が手渡された。本学は倉敷の大原美術館「学枝メンバーズ制度」にも加入。学生証を提示すれば、本館、分館、工芸・東洋館、児島虎次郎記念館を無料で観覧することができる。

入園できる。何度でも無料で示に限る）に館は通常展



佐野教授らによる男児への心臓手術▲

岡山大学病院は昨年12月13日、心臓の大動脈と肺静脈の位置が入れ替わる「完全大血管転位症」を患った男児（生後25日目）に対する難手術を行い、無事終了した。男児は生後14日以内であれば9割以上が成功する「完全大血管転位症」の手術を受ける予定だったが、冠動脈の異常を併せ持っていたため、手術が見送られていた。今回、小児心臓手術の豊富な実績を持つ本学に依頼があり、同12日、長野県からヘリコプターで緊急搬送。手術は、岡山大学病院心臓血管外科の佐野俊二教授らによる11人体制で行われた。

TOPICS

Okayama University

小児の先天性心臓病 難手術に成功

岡山大学のグローバル化を考える特別講座を受講した日本人学生、留学生たちが2月12日、森田潔学長に国際化に向けた提案書を提出した。講座は、学生目線で本学の国際化を考えようと附属図書館が企画。昨年12月から今年1月まで計4回あり、日本、アメリカ、ドイツなど7カ国の学生計25人が参加した。ディスカッションやプレゼンテーションを通じて、留学生にとって過ごしやすい環境づくりや海外で活躍



◀学生の提案に耳を傾ける森田学長（右奥）

▶提案書を提出する学生たち▼



TOPICS

Okayama University

学生が大学のグローバル化を協議

森田学長に提案書提出

▼全員で記念撮影



できる人材をつくる方法などを協議した。提案書は全21項目。「目的に応じた専門的な英語・日本語クラスの設置」「クラブ、サークルが留学生を受け入れることを奨励する」「日本人学生と留学生の交流機会を増やすための拠点を増設する」などがある。この日は、代表の学生5人が学長室を訪問。代表して、アメリカからの交換留学生ガードナー・ハティさんが提案書を学長に手渡した。

TOPICS

Okayama University



大学のPR動画制作

岡山大学企画・広報課は、米国人歌手ファレル・ウィリアムスの人気曲「Happy」に合わせて、学生、教職員が踊るミュージックビデオを制作した。YouTubeの「岡山大学チャンネル」で公開している。森田潔学長をはじめ、学生、教職員ら約300人が出演。学生2人が学長に会いに行くというストーリーで、キャンパスの楽しい雰囲気が伝わる映像に仕上げた。いちよう並木や中央図書館の時計台、鹿田地区のJホールなど、学内のさまざまな魅力的なスポットも登場する。映像時間4分で、公開期間は11月30日まで。

HAPPY
OKAYAMA UNIVERSITY
(岡山大学バージョン)

◀「HAPPY」岡山大学バージョン
<https://www.youtube.com/watch?v=W-eAwPVVLOc>

岡山大学のニュース&トピックスおよび最新情報は岡山大学のホームページからご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp>

12 December

7日 陸上競技部が第58回中国四国学生駅伝で10年ぶりに3位入賞

10日 大学院環境生命科学研究科の宮竹貴久教授が参画した研究成果が、農林水産省が選出する「2014年農林水産研究成果10大トピックス」に選定

11~16日 地域総合研究センターは、ポートランド州立大学のステイブン・ジョンソン特任教授を招き、ポートランドのまちづくりを学ぶ「まちづくりウィーク」を開催



12日 理学部4年の山根卓大さんが大阪・神戸アメリカ総領事主催の「第三回英語スピーチコンテスト」で3位に入賞

13日 岡山大学病院は、心臓の大動脈と肺静脈の位置が入れ替わる「完全大血管転位症」を患った男児(生後25日)に対する難手術を実施

16日 研究推進産学官連携機構は「第46回岡大サイエンスカフェ」を開催

17日 イルミネーションで交流広場を彩るイベント「岡山大学*輝き*2014」を開催。また、同日から25日までイルミネーションを点灯



18日 定例記者発表を開催

19日 推薦入試1、社会人入試等の合格者を発表

1 January

1日 安全衛生推進機構を設置

6日 自然生命科学研究支援センター公開「ロキウム」を開催

7~12日 埋蔵文化財調査研究センターは、キャンパス発掘成果展「鹿田荘の人と時代」を創立五十周年記念館で開催

1 January

8日 大学院教育学研究科の上田久利教授と自然科学研究科の吉野雄二教授が、地域社会への貢献や国際舞台での活躍が顕著な個人・団体に贈られる「第73回山陽新聞賞」の文化功労賞・学術功労賞をそれぞれ受賞



9日 2014年度岡山大学新技術説明会を東京都内で開催



13日 アフリカ地域の教育関係者ら5人が、3月5日までの日程で本学教員の指導のもと初等理科教授法の改善と学力評価手法を学ぶ研修を開始

15日 シンポジウム「循環共生型社会の実現による地域再生に向けて」を開催

15日 「植物力×異分野融合先端研究セミナー」を資源植物科学研究所で初開催

20日 大学院自然科学研究科機械システム工学専攻の大学院生でつくる2チームが、第13回学生によるビジネスアイデア提案コンテストでテクノロジー部門優秀賞と奨励賞をそれぞれ受賞

25日 生殖補助医療技術教育研究センターは、シンポジウム「生殖補助医療の安全・安心」を開催

28~30日 世界最大のナノテクノロジーに関する展示会「nanofes2015」第14回国際ナノテクノロジー総合展・技術会議」に出展

4日 鏡野町、独立行政法人日本原子力研究開発機構と三者間における連携協力に関する協定を締結



2 January

9日 推薦入試II、AO入試の合格者を発表

9日 大学院環境生命科学研究科の沖陽子教授が、岡山県の文化の向上に著しく貢献した個人・団体に贈られる平成26年度の岡山県文化賞を受賞



10日 キャリア開発センターは、卒業生のキャリア開発やネットワーク構築のための第14回卒業生ライフアップセミナー@東京を東京サテライトオフィスで開催

13日 セネガル共和国の小学校教員や教育関係者11人が、3月9日までの日程で本学教員の指導のもと初等理科教育を学ぶ研修を開始

13~14日 健康長寿社会を担う歯科医学教育改革キックオフシンポジウムを開催

17日 研究推進産学官連携機構は医療展示会「中央西日本メディカル・イノベーション2015」を開催

19日 優れた業績を挙げた若手研究者を顕彰する「岡山大学若手トップリサーチャー研究奨励賞」に大学院社会文化科学研究科の東陽一郎准教授、環境生命科学研究科の頼藤貴志准教授を選出し表彰



23日 研究推進産学官連携機構は「第47回岡大サイエンスカフェ」を開催

25~26日 平成27年度個別学力検査等前期日程を実施

26日 グローバル・パートナーズ招聘講演会「セルビア・未知のヨーロッパ」を開催

27日 定例記者発表を開催

3 March

2~3日 資源植物科学研究科が第31回資源植物科学シンポジウム及び第7回植物ストレス科学シンポジウムを開催

6日 個別学力検査等前期日程の合格者を発表

6~8日 地球物質科学研究センターが国際シンポジウムMISAVを開催

研究・臨床成果

岡山大学病院新医療研究開発センターの王英正教授らの研究グループは、2011~2012年にかけて、左心低形成症候群に対する心臓内幹細胞自家移植療法による幹細胞移植法の安全性と心不全治療における有効性を確認した。米科学雑誌「Circulation Research」に掲載。(12月・定例発表)

大学院環境生命科学研究科の三宅通博教授、岡山県農林水産総合センター畜産研究所との共同研究グループは、豚糞尿由来のバイオガスを燃料とする固体酸化燃料電池において、バイオガスからの炭素析出を抑制できる触媒の組成を決定し、作動温度600℃でLED電球の点灯に成功。(12月・定例発表)

大学院環境生命科学研究科の中村宜督教授、安部奈緒美日本学術振興会特別研究員らの研究グループは、食品成分のベンジルイソチオシアネートが転写因子Nrf2p65を介して大腸がん細胞の増殖を抑制する分子機構を世界で初めて解明。英国の科学雑誌「Cell Death & Disease」に掲載。(12月・定例発表)

自然生命科学研究支援センターの宮地孝明准教授、大学院医歯薬学総合研究科の森山芳則教授、資源植物科学研究科の馬建鋒教授、理化学研究所環境資源科学研究センターとの共同研究グループは、アスコルビン酸を葉緑体へ運ぶ輸送体を世界で初めて突き止めた。英国の科学雑誌「Nature Communications」に掲載。(1月・臨時発表)

大学院環境生命科学研究科の福田宏准教授、国立科学博物館の共同研究グループは、岡山県南部と香川県島嶼部に固有な陸産貝類(かたつむり)の新種を認識し、「アキラマイマイ」と記載・命名。日本貝類学会発行「Venus」に掲載。(1月・臨時発表)

大学院医歯薬学総合研究科の藤原俊義教授、岸本浩行助教、菊地寛次医師らの研究グループは、がん細胞を選択的に殺傷する遺伝子改変ウイルス製剤「テロメライシン」を用いて、消化器がんのリンパ節転移を低侵襲的に完全に消去する新たな治療法を開発し、ヒト大腸がんを直腸に移植したマウスでその効果を実証した。米国の科学雑誌「Molecular Therapy」に掲載。(2月・臨時発表)

大学院医歯薬学総合研究科の須藤雄貴教授、名古屋工業大学との共同研究グループは、電気信号を制御するタンパク質の機能を人工的に創成することに世界で初めて成功。アメリカ化学会誌「Journal of the American Chemical Society」に掲載。(2月・臨時発表)

大学院医歯薬学総合研究科の森田学教授、大森智栄大学院生の研究グループは、保健管理センターの岩崎良章准教授と共同で、12歳臼歯の生え方に異常がある大学生は、かみ合わせの異常が多いことを、2千人を超える横断研究で初めて突き止めた。「口腔衛生学会雑誌」に掲載。(2月・定例発表)

大学院医歯薬学総合研究科の鶴殿平一郎教授と榮川伸吾助教、西田充香子大学院生らの研究グループは、糖尿病治療薬のメトホルミンにがん細胞を殺傷する細胞の疲弊を解除し、がんを攻撃する機能を回復させる作用があることを証明。「米科学アカデミー紀要」に掲載。(2月・定例発表)

異分野融合先端研究コアの仁科勇太准教授らの研究グループは、日本原子力研究開発機構と北海道大学触媒化学研究センターと共同で、非常に薄い炭素シートに白金微粒子を満遍なく固定化し、同時にシリカコーティングする合成法を開発。従来よりも優れた触媒活性と耐久性を持つ触媒を作り出すことに成功。イギリスの科学雑誌「Chemical Communications」に掲載。(2月・定例発表)



- ① 路上で「クリケット」をして遊ぶ子どもたち
- ② コルカタ庶民の足オートリキシャーとタクシー
- ③ 青空理髪店



インド駐在員の
コラム
Column

インド感染症共同研究センター
事務職員
内藤 賢一郎

◀NICED



美しいニュータウン周辺の新興開発地区の様子

当センターは、2007年9月にコルカタ市の「インド国立コレラ及び腸管感染症研究所（NICED）」内に設置され、現在は文部科学省の『感染症研究国際ネットワーク推進プログラム（J-GRID）』に参画しています。

ここでの私の職務は、研究者の出張や勤務管理、物品購入から支払、インド人雇用者の給与支払、訪問者対応など多岐に渡ります。

こちらでは納期や時間は日本よりかなり適当（願望や目安のようです）。銀行が金額を間違えることもあります。最初は驚きましたが、異文化の中では、NOを言う力、

納得するまで説明する忍耐力や妥協案を引き出す交渉力、そして時には受け入れる寛かさも必要だと感じるようになりました。

インド社会の印象には、富裕層が先進国並みの生活、中・下層が映画「三丁目の夕日」のような高度経済成長期の雰囲気、最下層が物乞いや路上での生活、と激しい格差を感じますが、コルカタは全体的にのんびりしています。とはいえ、携帯電話はかなり普及していますし、最近では「スマホ」も多くの人が使い始めました。経済発展とともにコルカタも変わりつつあります。

読者アンケートの
ページを
開設しました。



興味のある記事や今後取り上げてほしいテーマ、その他本誌に対するご意見等をお聞かせください。

【アンケートの入力口は以下のURLです。】

<http://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/kohoshi.html>

Postscript by the Editor

この一年間、73号から76号まで、本誌の編集のお手伝いをさせて頂きました。編集長の名に値する「貢献」はとてもできませんでしたが、後藤前編集長や三浦副編集長（次期編集長）、そして、企画・広報課のスタッフのみなさんの的確なサポートのおかげにより、なんとか任を終えることができました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

編集後記

ところで、最近のある民間リサーチ会社の調査結果によれば、中国・四国地方の「工学ブランドカレッジ」(有職者ベース)で、岡山大学は、主要58大学中、総合第2位にランクされています。ブランド・イメージ項目別では一般的には、「センスがいい、カッコいい」などで、学生については「集

この調査結果は、外からの岡山大学像を知るうえで、少なくとも一つの参考にはなるでしょう。その意味で、これらのデータを岡山大学のいわば「強み」として、これを今後の広報活動の中により積極的に位置づけることも考えてよいのではないかと考えます。本誌が、そのための重要な媒体として、さらに「センスがよい」の存在があり、そして、ますますインタラクティブな広報誌となることを願っています。

法学部准教授 ◆ 高橋 正徳